25　ヨーロッパにおける日本殉教者劇
――細川ガラシャについてのウィーン・イエズス会ドラマ――

新山カリツキ富美子

1. イエズス会ドラマ

イエズス会は1534年に、スペイン・バスク地方出身のイグナチウス・ロヨラ（1491–1556）とフランシスコ・ザビエル（1506–1552）らによって、宗教改革と対抗する内部革新と宣教と教育のために創立された修道会である。

イエズス会創立当初から教育と宣教を目的として、中等教育機関のギムナジウムを地域ごとに建設し、会の主旨に従った宣教師、特にアジア、アフリカへ向けての宣教師養成に力をいれていた。それ故、宣教に欠くことのできない、キリスト教の教理はもとより、それを促進させるより効果的な手立てとしてラテン語、音楽、ダンス、フェンシングなどが教えられ、それらをすべて取り入れたドラマを学期の終わり、または聖人の祝祭日に上演することが義務づけられていた。16世紀から18世紀まで各地のギムナジウムで上演された音楽劇の主題の多くは、宣教地での殉教に関するものであった。

1549年、ザビエルの来日によって、キリスト教が日本にもたらされ、当時の主だった大名に歓迎され、全国に広まった。いわゆる「キリシタン大名」は、九州では大村純忠、有馬晴信、天草鎮尚、大友宗麟、中央では高山右近、蒲生氏郷、小西行長と、黒田孝高、北では津軽信枚などがいた[1]。イエズス会は、日本の宣教状況を詳細にローマの本部に報告しつづけた[2]。

1587年の豊臣秀吉のバテレン追放令に始まる280年余の弾圧によって、多くの宣教師と信徒が殉教した。そのうちの一人は、1600年に非業の死を遂げた細川ガラシャである。当時の日本では考えられないほど、ヨーロッパ人は日本の殉教者に強い関心を持っていた。現存する最古記録によれば、関ケ原の戦いの7年後の1607年にイタリアの港町ジェノヴァで、小西行長を主題とする演劇「日本のアウグスト・津神殿」（Augustino Tucamidoni Re Giaponese）が上演されていた。

1678年、イエズス会司祭コルネリウス・ハザルトが、イエズス会のラテン語報告書をもとにドイツ語で著した『教会史　全世界に広まるカトリック教会の歴

1　フーベルト・チースリク『キリシタン史考』長崎：聖母の騎士社、1995年
2　松田毅一監訳『十六、七世紀イエズス会日本報告書』（第１期５巻、第２期３巻、第３期７巻）京都：同朋舎、1987 ～ 1998年。

史』の第1巻第3部「日本教会史」は日本の宣教と殉教を紹介している[3]。これに基づいてドイツ語圏の多くの作品が作られた。

ハプスブルク家の保護下にあるウィーンのイエズス会では、日本の殉教者を扱った劇は、ヨーロッパ各地で150以上の作品が作られ、500回以上の上演記録が、トーマス・インモース教授の研究をもとにした、私の現在までの調査研究によって確認されている。また書物としても出版されて、ハプスブルク帝国の人々に驚嘆させた。ただし、ウィーンの「イエズス会ドラマ」は、再演されないのが原則であった。

当時の神聖ローマ皇帝レオポルドI世（在位1658–1705）は、音楽に造詣が深く、教会音楽、オペラ歌曲、セレナーデ、オラトリオなどを作曲していた[4]。皇室ハプスブルク家の恒例祝日に上演されたドラマ（皇帝ドラマと称され、音楽を伴う）も度々キリシタン大名をテーマとした[5]。

ウィーンで上演されたドラマは10ほど現存している。そのうち、1614年の「豊後のシモンと妻、3人の子供たちの殉教」（Quique Japoniae Martyres sub Canziuza tyramno Ludvicus）、1622年の「聖イグナチオとザビエル」（Comedia de SS: Patribus Ignatio et Xaverio）、1651年の「フランシスコ・ザビエル」（Franz Xaverius）がある。そして、1698年7月31日、イグナチウス・ロヨラの祝日と后妃エレオノーレの霊名「聖マグダレナ」の祝日（7月22日）を兼ねて、レオポルドI世とその家族、招待客の前で上演されたのが細川ガラシャの音楽劇「気丈な貴婦人」（Mulier fortis）である。ハプスブルク家の女性たちの手本とされた細川ガラシャは、舞台上だけではなく、印刷物も出版されて、ヨーロッパで広く知れ渡っていた。

オーストリアのみでなく、ドイツ、スイス、イギリス、ハンガリー、チェコ、ポーランドなどでもイエズス会演劇の上演は500回以上に及ぶ記録がある。ドイ

3　コルネリウス・ハザート（Cornelius Hazart, 1617–1690）はオランダ出身のイエズス会神父。『教会史　全世界に広まるカトリック教会の歴史（Kirchen-Geschichte, das ist catholisches Christenthum durch die ganze Welt ausgebreitet）』（Wiener Universitätsdruckerei Leopold Voigt, 1678）の第1巻第3部「日本教会史（Japonischer Kirchen-Geschichten）」（pp. 1–290）。オーストリア国立図書館に3冊の写本が存在する。

4　作品は、特別版・皇帝版（Kaiserbände der DTÖ）に皇帝の父ファエルデイナンドIII世の作品と共に収められている。 ウィーンでは現在も日曜日のミサに彼のミサ曲がたまに演奏されている

5　1666年、皇帝レオポルドI世の最初の結婚の祝賀に、「Honoris Ucondono」と題する高山右近の信仰を語る音楽を伴う劇（バロックオペラ）が上演された記録が残っている。台本がオーストラリア国立図書館（ONBC Cod. 13241）に保管されている。

ツでは、カトリック教会が宗教改革後のプロテスタントの勢力を抑える必要性から、特にバイエルン地方のアイヒシュテート、インゴルシュタットで多くの作品が上演された。スイスでは、古くから民衆の野外劇の伝統があり、フランシスコ・ザビエルがチューリッヒ地方の守護聖人とされているので、日本の殉教者にも関心が高く、多くの作品が上演され、その資料（台本や楽譜など）は今もその地の図書館、修道院に保管されている。イエズス会ドラマの最後を飾るのは、私の調査では、1836年にウィーンで演じられた有馬のミハエルの殉教劇であった。

18世紀に入り、ドラマの中心がウィーンからザルツブルクのベネディクト派のザンクト・ペーター修道院に移り、「イエズス会ドラマ」の代わりに、「ベネディクト会ドラマ」と称されるようになった。フランツ・ヨーゼフ・ハイドンの弟ミハイル・ハイドン[6]が「右近殿〔高山右近〕」（Ukondono）を作曲し、アウグスブルク出身のエルンスト・エベリンが「小西行長」（Augustinus Tsucamidonus）などを作曲していた。

作品の保存に関しては、オーストリアでは、「イエズス会ドラマ」の記録は ウィーンだけでなく、グラーツ、リンツ、ザルツブルクを始め、イエズス会ギムナジウムだった施設の図書館、スイスのベネディクト宣教会本部や他の修道院にも保管されている。だが、残念なことに、インモース教授の遺稿や掛け替えない資料は日本から所属のベツレヘム宣教会本部に送られてから、修道院の文庫に30年間、封じ込められてしまい、閲覧も許されていない。

2. 細川ガラシャについての音楽劇「気丈な貴婦人」

この音楽劇の原本に出会うきっかけを作ってくださったのは、1989年にウィーン大学カトリック神学部に客員教授として来訪したインモース教授の特別講演「オーストリアのバロック演劇における日本人の主役たち」（Japanische Helden im österreichischen Barocktheater）である。それを拝聴してから、細川ガラシャをテーマとするドラマを調査しようと決めて、インモース教授の示唆により、オーストリア国立図書館内の手稿本の部門に行き、ウィーンのイエズス会ドラマの収集本5冊（Cod. 9809–9813）の存在を確かめることができた。

1冊目（Cod. 9809）から読み始めて1週間以上経ったとき、4冊目（Cod. 9812）7番目の作品「気丈な貴婦人」（Mulier fortis）が細川ガラシャを主人公とする音

6　ミハイル・ハイドン（Michel Haydon, 1737–1806）は「ザルツブルクのハイドン」と親しまれ、「右近殿」（Ukondono）の作曲は現在、混声4部合唱曲のみが残っている。しかし、彼の多くのミサ曲と作曲が現存している。

楽劇だと発見した[7]。その時の感激は、初めてのイスラエル旅行の時、ナザレトの受胎告知教会の回廊に並ぶ各国の聖マリア像と絵画の一角に掲げられた十二単のマリアの絵（まさにガラシャ！）に出会った時と同じだった。思わず「あ！」と声を立てて、図書館の沈黙を破ってしまいそうだった。

他の黒ずくめの題名ページと違って、7番目の題名ページは金・赤・緑などの色が施され、次のように記されている。

MULIER FORTIS（気丈な貴婦人）
Cuius pretium de ultimis finibus（全世界の国境を越えて）
sive

GRATIA REGINI TANGO REGINA（グラーチア、丹後の王国の女王）

この手稿本（Cod. 9812）は326枚の紙からなり、大きさは310 x 220 mm、楽譜のページは10段の5線紙になっている。表紙は白い皮の製本である。各作品の最初のページは、編み糸のひもが縫い付けられている。その272枚目の右ページから279枚目の左ページまでが「気丈な貴婦人」である。

この台本は、前述ハザルト著書の第1巻第3部「日本教会史」の第13章「丹後の王妃の改宗とキリスト教的美徳」（Bekehrung und Christliche Tugenden der Königin von Tango）に基づいて、ウィーンのイエズス会士で、シレジア出身のアドルフ（Johann Baptest Adorf, 1657–1708）が書いたものである。彼は1696～1707年にイエズス会ギムナジウムを統率した教授で、後期バロック・ドラマの代表的作者で、この手稿本の作品の大半を書いている。作曲家はオルガニストで音楽教師のシュタウト（Johann Bernhard Staudt, 1654–1712）である。シュタウトはギムナジウムの生徒の時、日本の殉教劇に出演していた[8]。この二人が共作したイエズス会ドラマは40作以上残っている。

7　オーストリア国立図書館所蔵手稿本（ÖNB. Cod. 9809–9813）、Johannes Baptista Adolph, Drama varia a gymnasio domus professe S.J. (a.1687–1704) は、Waltraute Kramerの博士論文*Die Musik im Wiener Jesuitendrama von 1677–1711* (Wien 1961) で言及されているが、丹後が中国地方の地名として書かれただけで、特別な考察もなく眠っていた。第4冊目Cod. 9812は、作品の上演年代からみれば、5冊の中で最初に書かれたものだとわかる。ちなみに各冊7つから8つの作品が収められている。

8　1665年のレオポルドI世とスペイン王女マルガレータとの結婚式に演じられた高山右近の劇「Honoris et Pietatis onnubium sive Ucondonus」に12歳のシュタウトはギムナジウムの生徒として出演している。

同じ作品で、1698年印刷のラテン語とドイツ語併記台本（ミュンヘン国立図書館所蔵）の題名のドイツ文は以下である[9]。

Gratia Königin deß Reichs Tango（丹後の国の女王・細川グラーチア）
Dessen Werth von den eussersten Weld Enden（その美徳は全ての境を超えて）
Berühmbt von Stanhaftigkeit in Christlichen Glauben
（不変なるキリストへの信仰で名高いグラーチア）

題名ページの下半は、観劇者リスト、すなわち皇帝レオポルドⅠ世、后妃エレオノーレ・マグダレーナ・テレジア、二人の皇子（ヨセフ、カーロ）、４人の皇女（マリア・エリザベート、マリア・アンナ、マリア・ヨセファ、マリア・マグダレーナ）が記載されている。皇女たちはガラシャを手本にするように期待されたのだろう。題名ページの色彩と皇帝一家揃った観劇は、この音楽劇が重んじられたことを意味する。

この音楽劇の概要として、以下のように記されている。

> 丹後の国の王妃グラーチア〔ガラシャ〕は、国主ヤクンドーヌス〔細川忠興〕の留守中、洗礼を受け、子供たちにもキリスト教の信仰を教える。戦場から戻ってきた忠興は、ガラシャの入信を知って激怒し、ガラシャを虐待し、邪教への帰依を迫り、殺すと脅した。ガラシャは信仰を守り続け、その拷問に力尽きて、1590年8月、変わらぬ信念の魂が天に上げられた。忠興はガラシャの死後、自身の残忍な行いに苦悩し、暴君からガラシャの信仰の素晴らしい伝達者へと転身した。

劇中、細川忠興は野蛮な王「レックス・ヤクンドーヌス」（Rex Jacundonus）と名づけられる。

この音楽劇は、プロローグ、3幕、エピローグ、二つのコーラスという構成である。トーマス・ア・ケンピス（Thomas à Kempes, 1380–1471）の名著『キリストに倣いて』（*De Imitatione Christi*）を座右の書とするガラシャを描き、善と悪を対照させ、会話、音楽、ダンスを合わせたものである。

この劇の音楽は、大方は物語のための小道具のように登場する。ゆえに音楽場

9　ドイツ語併記は、ラテン語に弱い鑑賞者を助けるため自国語テキストPeriocheである。München, Bayelische Staatsbibliothek Cod,4^{0} Bav. 2184, I, 45.に収蔵される。

面はこの残されている写本のなかでも、一つ一つの楽譜が書かれておらず、ただ示唆のみのところもある、それはこの時代の劇音楽の習慣で、前奏曲、間奏曲などを、既成の自作曲、または同時代の作曲者の曲を使用することを表していることで明らかである。また、ダンス、フェンシングの場面が必ず挿入されている。それは当時のイエズス会ギムナジウムは、その社会的位置を反映し、身のこなし、いかなる状況に接しても廷臣する術を身に付けておくことが教育方針で、専門のダンス教授、フェンシング教授がいたことが知られている。

56人の役者が登場する（役者名が写本の最後頁にすべて記入されている）。大半は生徒で、せりふの短い役があてがわれて、主役のグラーチア（Gratia）＝ガラシャとヤクンドーヌス（Jacundonus）＝忠興の台詞は非常に長いので、成人役者が演じた可能性が高い。イエズス会教師・生徒・専門の声楽家、王宮楽団の演奏家の共演によって上演されたようである。

プロローグとエピローグは各6曲ずつがシンメトリーに組まれ、主人公の気持ちが音楽に凝縮され、徐々に終局へ導かれる。音楽の形式は厳密で、簡潔である。作曲家シュタウトは、ヴェネチア楽派の様式を取り入れ、修道会劇の域を越えず、無闇なコロラトール（装飾的音節）を避け、詩の韻を踏まえた曲をつけている。形式は当時のバロック劇・音楽に則って、劇の進行は、会話劇として演じられ、音楽場面は、それを縁取り、アレゴリーで歌われ、ガラシャの揺るぎない信仰を柱に喩え、善の不変（*Constantia*）と悪の怒り（*Furor*）との戦い、そして永遠の命を獲得する善の勝利を、ソロ、コーラスで歌い、時代の恒例のダンスで彩られている。その水準は当時の上流知識階級を観客をも満足させる高さである。

アレゴリーのアドベルジタス（切迫）、コンスタンチア（不変）、インクイエス（不安）はガラシャの気持ちを意味し、フロール（怒り）、クルデリタス（無情）、ポエニチュード（懺悔）は忠興の精神状態を表す。中心的な意味はアレゴリーに秘められている。アリアに伴われる器楽奏の平坦なリトルネッロ（反復）は、主人公の内面的動揺をよく表現する。重唱は、悲惨な最期にいたるまでの彼女の感情の変化、天上の幸への憧れを示し、史実の一部分をも体験させてくれる。

ウィーンの手稿本には、2曲のダンス曲が書かれている。それは、1幕2場の忠興凱旋の場面で、マーチとイタリアの伝統的ダンス曲ガリアルダがコーラスとともに挿入され、忠興と家来たちの登場に華を添え、ドラマチックな効果を作り出している。フェンシングの場面は、通常の授業の成果を披露することにもなる。忠興の凱旋祝賀の大衆のコーラスは、トランペットに伴奏され、領主の権威を壮麗に表現する。その舞台装置は皇帝自らが指示しただろうとうかがえる。当時の

上流知識階級の観客をも満足させる高い水準だったと思われる。

3. 音楽劇「気丈な貴婦人」と史実との相違

この作品の主題は、ガラシャの堅い信仰を伝え、夫からの拷問にも屈せず、地上の幸より、天上の永遠の命を信じて亡くなったことである。もちろん、これはイエズス会の報告書に記されたガラシャの史実と違う。

1563年、織田信長（1534–1582）の名将明智光秀（1528–1582）の三女として誕生した玉は、16歳の時、信長の命により名将細川幽斎の息子忠興と結婚した。しかし、父の謀反が起こした本能寺の変により、夫に離縁され、丹後の山奥の味土野に幽閉生活を余儀なくされた。2年後、秀吉によって夫との復縁を許され、大坂に移った。侍女清原マリア（既にキリスト教徒）からキリスト教を知り、感銘を受けた。イエズス会報告書によれば、「野蛮な王（＝忠興）は、高山右近（Justus Ucondonus）と交際があり、右近から既に、キリスト教について聞かされており、玉は関心を示したが、野蛮な王はびくともしなかった」とある。玉は、忠興の留守の間に洗礼を受けた。洗礼名ガラシャ（Gratia）には、感謝、愛、恩寵の意味がある。九州から戻ってきた忠興はこれを知り、激怒する。

1598年、秀吉の死後、家臣たちは、東軍徳川家康陣と、西軍石田三成と連合した大名たちの陣とに分かれた。細川は石田側の敗北を見抜き、徳川側についたが、石田がガラシャを人質にとることを心配した忠興は家臣に、その事態になれば、武士道に殉じてガラシャを絶命させて、屋敷に火をかけるように命じてあった。

キリスト者としての掟を守り、自殺を避け、人質になることをも拒んだガラシャは、家臣や腰元たちの殉死を禁じてから、家臣小笠原少斎に介錯させ、死に到った。彼女の死を知った石田は、人質を取るという戦略をあきらめた。ガラシャの命は多くの人を救ったことになったのである。関ヶ原の戦いはたった一日で、徳川方の勝利と石田の敗北で終わった。

戦場から戻った忠興はガラシャの最期を聞いて[10]、深い感銘を受け、イエズス会神父オルガンチーノに、ガラシャのための追悼ミサを懇願した[11]。この史実は、

---

10 「霜女覚書」。霜女はガラシャの腰元の一人で、ガラシャの命令でガラシャの最期を見届け、教会の神父に報告した。それを書き留めたものが「霜女覚書」で、現在も細川家の永青文庫に保存されている。

11 松田毅一監訳『十六、七世紀イエズス会日本報告書』京都：同朋舎、1987 ～ 1998年。第3巻244–246頁、第4巻141–147頁に、亡妻ガラシャのために2回にわたって（細川）越中殿が盛大な追悼ミサを望んだことが報告されている。

音楽劇「気丈な貴婦人」の第3幕第6場の忠興のキリスト教改宗の素材となっている。しかし、忠興が実際受洗したかどうかはさだかではない。彼の遺品にキリスト教のシンボルが多く見つかっている。ガラシャが永遠の命を望んでいたことは、辞世の歌「散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ」からも読み取ることができる。

当時、細川ガラシャはレオポルドI世の后妃エレオノーレの生き方と比較され、賞賛されていた。たとえば、1721年、ウィーンで出版された后妃の伝記において、二人の相似点が指摘されている[12]。伝記によると、后妃エレオノーレ（Eleonore Margdalena v. Pflantz-Neuburg, 1655–1720）は信仰篤く、一生神に仕える誓願を立てたが、若い后妃を二人相次いで失ったレオポルドI世の再三の懇願により、3番目の后妃となった。1711年に夫レオポルドI世の歿後、二人の息子が成人するまで、政治に大きな影響を与えた。息子は後にそれぞれ皇帝ヨセフI世と、皇帝カールVI世になった。姑の創設した女子のための勲章 Sternkreuzorden[13]を再興し、自身は常に黒い服を纏い、十字架を胸にかけていた。彼女とガラシャとの共通点は、一つめは、類稀な美貌、気丈夫な性格、強い信仰、そして伝統を重んじること。二つめは、二人とも『聖書』の次にケンピスの『キリストに倣いて』を愛読したこと[14]。三つめは、信仰の証の十字架をつねに胸に提げていたこと。確かに音楽劇の中でも、ガラシャが娘たちに十字架を与える場面がある。このようなガラシャとの類似点は、エレオノーレの死亡告示にも書かれて、彼女の弟でドイツのデューリンゲンの大司教によって各地に知れわたるようになった。

当時のヨーロッパでは、多くのバロック演劇があるが、女性を主人公にするものは非常に少なかった。遠い国の女性の殉教死の音楽劇「気丈な貴婦人」がヨーロッパの中心のウィーンで上演されたことは、センセーショナルな出来事であったに違いない。

4. 日本での再演の意義

現存するイエズス会ドラマのうち、日本のキリスト者を主役にしたもので、音

---

12 *Leben und Tugenden Eleonorae Margaretae Theresiae, Römischen Kayserin*. 1721 Wien bei Schwendimann, p. 93. See Margrit Dietrich, “Gratia Hosokawa, Ein japanisches Vorbild für die Habsburger Dynastie„ in *Theologie zwischen Zeiten und Kontinenten: für Elizabess Gössmann*, eds. Theodor Schneider, Helen Schüngel-Straumann, Vienna: Herder, 1993.

13 ハプスブルク家の男性に贈られるGoldenen Vliesに対しての女性のための勲章である。

14 『聖書』に次いで、当時ヨーロッパ人愛読されていた。フロイスの報告書には、ガラシャの座右の書は『キリストに倣いて』と書いてある。

楽の部分を含めて完全な姿で保存されたのは、「気丈な貴婦人」だけである。音楽劇自体の歴史的、文化的価値だけではなく、オーストリアと日本との文化交流の始まりを示す貴重な資料でもある。

この音楽劇の台本と楽譜は、ウィーン大学音楽学部パス教授と私の共同編集で、インモース教授の序文「宗教史への紹介」、デイートリッヒ教授の論文「上演と演劇論」と、ラミンガー博士のドイツ語訳を添えて、『オーストリア音楽集大成』（DTÖ）第152巻として2000年に出版されるに至り、永久保存されることとなった[15]。

この刊行をきっかけに、私は日本各地で講演して、NHKのTV番組「その時歴史が動いた」にも報道され、多くの人々の関心を引きつけた。2004年、イタリアのクレモナ市で「気丈な貴婦人」が300年以上の時を隔てて初めて再演された[16]。その時の感激を忘れることができない。それ以来、ガラシャの故国の人々にもこれをいつか鑑賞していただけるようと祈念しつづけてきた。

昨年、友人とガラシャの幽閉地、丹後の山奥の味土野を訪れて「気丈な貴婦人」に思いを馳せた。宮津市内の宮津カトリック教会に足を踏み入れた途端、美しく清楚なステンドガラスの光の中にしっかりと立つ柱を見て、これこそ「気丈な貴婦人」の中で、ガラシャの信仰の強さを喩えた「柱」だと直感的に思った。すぐ神父様に「この柱の木材はどこからきたのでしょうか」と伺ったら、なんと「味土野から切り落とされたそうです」というお答えだった。

2017年10月、宮津のカトリック教会で「気丈な貴婦人」を再演することになった。宮津は、細川の居城でガラシャが忠興と幸せな2年を過ごした地、日本三景の一つ「天橋立」を目の前にした風光明媚な処。ガラシャを褒め称える1698

---

15 *Mulier fortis : Drama des Wiener Jesuitenkollegium* / Johann Bernhardt Staudt; veröffentlicht von Walter Pass und Fumiko Niiyama-Kalicki; unter Mitwirkung von Margret Dietrich, Thomas Immoos und Johann Ramminger, Graz: Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, 2000.「オーストリア音楽集大成Denkmäler der Tonkunst in Österreich」（DTÖ）はG. Adlerの編纂で1894年から始まり、現在まで160巻を刊行してきた。*Mulier fortis*の刊行については、米田かおり「細川ガラシャとイエズス会の音楽劇Walter Pass/Fumiko Niiyama-Kalicki校訂：JohannBernhardt Staudt (1654–1712)《Mulier Fortis》（DTÖ Bd. 152）を中心に」（『桐朋学園大学研究紀要』28号、2002年）を参照。残念なことに、約2年前、あるグループが、この台本のDTÖ刊行を無視して、自作品を「Mulier fortisの日本初演」と名付けて上演した。

16 2004年5月、イタリア・パヴィア大学の支援で、音楽学部教授アンジェラ・ロマニョーニの指揮で、学生、歌手・楽器のソリストたちの協力で、オーストリアの国立図書館に300年以上眠ったガラシャの演劇が日の目を見た。同じメンバーたちが今回の宮津上演にも協力してくれる予定。

年の音楽劇「気丈な貴婦人」を忠実な形で再演することは、この音楽劇の「里帰り」となり、当時のヨーロッパ人の抱いていたガラシャへの敬愛を今日の日本人に知らせ、ガラシャの物語から始まった、300年にわたる日本とオーストリアの文化交流の新しい展開でもある。

付録：

「気丈な貴婦人Mulier fortis」の登場人物と音楽

Rex Iacndonus	細川忠興
Regina Gratia	ガラシャ・細川玉
Princeps Filius 1.	細川忠隆
Princeps Filius 2.	細川忠利（または興秋）
Filia 1.（Filia maior natu.）	細川お長
Filia 2.（Filia minor natu.）	細川多羅
Charillus（Regina Charus Adolescens Nobilis）	小笠原少斎
Orcamus（Bonziorium Praefect）	高僧（太閤側）
Colinus（Aula Praefectus）	石見（細川家の家老）
Aulicus 1.-3.	細川家の家臣たち
Ephebulus 1.（Blandus, ej usdem Ephebus）	玉の腰元・清原マリア
Ephebulus 2.（Regina Charus Adolescens Nobilis）	腰元2
Ephebulus 3, 4.	腰元3, 4
Christianus	キリスト者（高山右近）
Filius Christiani	右近の息子
Puer Christianus 1, 2.	キリスト者の子供1, 2
Miles 1.-3.	兵士たち
Adol 1.-8.	貴族の若者たち
フェンシングの教授とその息子	

音楽部分（アレゴリー）

Constantia コンスタンチア	不変（テノール）
Furor フロール	怒り（バス）
Crudelitas クルデリタス	無情（テノール）
Inquies インクイエス	不安（メゾソプラノ）
Adversitas アドベルジタス	切迫（メゾソプラノ）

Poenitudo ポエニチュード	懺悔（コントラアルト）
Praemium プレミウム	報い（ソプラノ）
Populus ポプルス	民衆（混声4部）

器楽アンサンブル

Clarini I, II	バロック高音トランペットI, II.
Violini I, II.	ヴァイオリンI, II.
Viola	ヴィオラ
Viola da gamba	ヴィオラ・ダ・ガンバ
Teorba e chitara barocco	テオルバとバロックギタラ
Cembalo	チェンバロ